



日本文学全集 18



佐藤春夫

田園の憂鬱

室生犀星

杏　　子



河出書房

日本文学全集 18 佐藤春夫
室生犀星



© 1973

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和46年5月29日 初版発行
昭和48年5月20日 再版発行

著	者	佐藤	藤生	春	夫
発	行	室中	生島	犀	之
印	刷	和	田	隆	三
装		原		彰	弘
印	刷	・東洋印刷株式会社			
製		本・中央精版印刷株式会社			

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります

目次

佐藤春夫

田園の憂鬱

室生犀星

杏っ子

年譜

三六九

文学入門

奥野健男 四二三

作家の横顔

中谷孝雄 四三九

室生朝子 四三三

五

八五

佐
藤
春
夫

田園の憂鬱

或は病める薔薇

I dwell alone

In a world of moan,

And my soul was a stagnant tide,

Edgar Allan Poe

私は、呻吟の世界で

ひとりで住んでいた。

私の霊は澱み腐れた潮であつた。

エドガア フラン ポオ

その家が、今、彼の目の前へ現われてきた。

初めのうちは、たいへんな元気で砂ぼこりを上げながら、主人の後になり前になりして、飛びまわり纏わりついていた彼の二足の犬が、ようよう柔順になつて、彼のうしろに、二足並んで、そろそろ随いてくるようになった頃である。高い木立の下を、路がぐつと大きく曲つた時に、

「ああやつと来ましたよ」

と言いながら、彼らの案内者である緒毛の太っちよの女が、片手で日にやけた額から滴り落ちる汗を、汚れた手拭で拭いながら、別の片手では、彼らの行く手を指し示した。男のように太いその指の尖を伝うて、彼らの瞳の落ちたところには、黒っぽい深緑のなかに埋もれて、目眩しいそわそわした夏の朝の光のなかで、鈍色にどつしりと或る落着きをもつて光っているささやかな萱葺の屋根があつた。

それが彼のこの家を見た最初の機会であつた。彼と彼の妻とは、その時、おのおのこの草屋根の上にさまようていた彼らの瞳を、互いに相手のそのの上に向けて、瞳と瞳とで会話をした――

「いい家のような予覚がある」

「ええ私もそう思うの」

その草屋根を見つめながら歩いた。この家ならば、いつか遠い以前にでも、夢にであるか、幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓からでもあつたか、何かで一度見たことがあるようにも彼は思った。その草屋根を焦点としての視野は、実際、どこでも見出されそうな、平凡な田舎の横顔であつた。しかも、それがかえつて今の彼の心をひきつけた。今の彼の憧れがそんなところにあつたからである。そうして、彼がこの地方を自分の住家に択んだのも、またこの理由からにほかならなかつた。

た。

広い武蔵野がすでにその南端になつて尽きるところ、それがようやく山国の地勢に入ろうとする変化——いわば山国からのかすかな余情をたたえたエピロオグであり、やがて大きな野原への波打つプロオグでもあるこれらの小さな丘は、目のとどくかぎり、ここにも起伏して、それが形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じているあたりに、その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下つた草屋根があつた。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣りにして、たとえ三つのはげしい旋風の境目にできた真空のように、世紀からは置きっぱなしにされ、世界からは忘れられ、文明からは押し流されて、しょんぼりと置かれているのであつた。

いったい、彼が最初にこんな路の上で、限りなく楽しみ、また珍しく心のくつろいだ自分自身を見出したのは、その同じ年の暮春の或る一日であつた。こんな場所にこれほどの片田舎があることを知って、彼はまず驚かされた。しかもその平靜な四辺の風物は彼に珍しかった。ずっと南方の或る半島の突端に生れた彼は、荒い海と峻しい山とが激しく咬み合つて、その間で人間が微小にしかし賢明に生きている一小市街の傍を、大きな急

流の川が、その上に筏を長々と浮べさせて押し合ひながら荒々しい海の方へひしめき合つて流れてゆく彼の故郷のクライマックスの多い戯曲的な風景にくらべて、この丘つづき、空と、雑木原と、田と、畑と、雲雀との村は、実に小さな散文詩であつた。前者の自然は彼の峻厳な父であるとするれば、後者のそれは子に甘い彼の母であつた。「帰れる放蕩息子」に自分自身をたたえた彼は、息苦しい都会の真中であつて、柔かに優しいそれ故に平凡な自然のなかへ、溶け込んでしまいたいという切願を、かなり久しい以前から持つようになっていた。おお！そこにはクラシックのような平靜な幸福と喜びとが、人を待っているにちがいない。Vanity of vanity, vanity, all is vanity!「空の空、空の空なる哉都て空なり」或はそうでないにしても……。いや、理屈は何もなかった。ただ都会のただ中では息がつまつた。人間の重さで圧しつぶされるのを感じた。そこに置かれるには彼はあまりに鋭敏な機械だ、そこが彼をいやがうえにも鋭敏にする。そればかりではない、周囲の騒がしい春が彼を一層孤独にした。「ああ、こんな晩には、どこでもいい、しつとりとした草葺の田舎家のなかで、暗い赤いランプの陰で、手も足も思うぞんぶんに延ばして、前後も忘れる深い眠に陥入つて見たい」という心持が、華やかな白熱燈の下を、石畳の路の上を、疲れ切った流浪人の

ような足どりで歩いている彼の心のなかへ、せつなく込み上げてくるものが、まことにしばしばであった。「おお！ 深い眠、おれはそれを知らなくなつてからもう何年になるであろう？ 深い眠！ それはいわば宗教的な法悦だ。おれの今最も欲しいのはそれだ。熟睡の法悦だ。すなわち肉体がほんとうに生きている人の法悦だ。

俺はまずそれを求める。そのある処へ行こう。さあ早く行こう！」彼は自分自身の心のなかでそう呟いた。或は、口に出してさえ呟いた。そうして矢も楯もたまらない、郷愁に似たような名づけようのない心が、その何処とも知れない場所へ、自分自身を連れて行けとせがむのであった……。(彼は老人のような理智と青年らしい感情と、それに子供ほどの意志とをもった青年であつた。)

その家が、今、彼の目の前に現われてきたのである。

道の右手には、道に沿うて一条の小渠があつた。道が大きく曲れば、渠もそれについて大きく曲つた。そのなかを水は流れてゆき流れてくるのであつた。雑木山の裾や、柿の樹の傍や厩の横手や、藪の下や、桐畑や片隅にぽっかり大きな百合や葵を咲かせた農家の庭の前などを通つて。幅六尺ほどのこの渠は、事實は田へ水を引くための灌漑であつたけれども、遠い山間から来た川上の水を真直ぐに引いたものだけに、その美しさは溪と言いたいような気がする。青葉を透して降りそそぐ日の光

が、それを一層にそう思わせた。へどろの赭土を洒して、洒し尽して何の濁りも立てずに、浅く走つてゆく水は、時々ものに堰かれて、ぎらりぎらりと柄になく閃いたり、そうかと思うと縮緬の皺のように繊細に、或は或る小さなびくびくする痙攣の発作のように光つたりするのであつた。或は、その小さな輝きが魚の鱗のように重り合つているところもあつた。涼しい風が低く吹いて水の面を滑る時には、そこは細長い瞬間的な銀箔であつた。薄だの、もう夙くにあの情人にものを訴えるようなセンチメンタルな白い小さい花を失つた野茨のひとつかたまりの藪だの、その外、名もないしかしそれぞれの花や実を持つ草や灌木が、渠の両側から茂り合いかぶさるかかると、水はそれらの草のトンネルをくぐつた。そうしてその影を黒く涼しく浮べては、ゆらゆらと流れ去つた。或る時には、水はゆつたりと流れ淀んだ。それは旅人が自分の来た方をふりかえつて佇むのに似ていた。そんな時には土耳古玉のような夏の午前空を、土耳古玉色に——或は側面から透して見た玻璃板の色に、映してゐるのであつた。快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身軽く滑走し、時々その尾を水にひたして卵をそこに産みつけていた。その蜻蛉は微風に乗つて、しばらくの間は彼らと同じ方向へ彼らと同じほどの速さで、一行を追うように従うていたが、何かの

拍子^{ひょうし}について空さまに高く舞い上った。彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉^{せいてい}を呼びかけて祝福したいような子供らしい気軽さが、自分の心に湧き出るのを彼は知った。そうしてこの楽しい流れが、あの家の前を流れているであろうことを想うのが、彼にはうれしかった。

はげしい暑さは苦しい、楽しい、と表現しようとして木の葉の一枚一枚が宝玉の一断面のように輝くと、それらの下から蟬は焼かれているように呻いた。灼けた太陽は、空の真中近く昇ってきていた。しかし、彼の妻は、暑さをさほどには感じなかった。しかし、彼の妻から暑さを防いだものは、その頭の上の紫陽花色^{あじさい}に紫陽花の刺繡^{しゅう}のあるパラソル——貧しい婦人の天蓋——ではなかった。それは彼の女の物思いであった。彼の女は今歩きながら考えふけている、暑さを身に感じる閑もないほど。彼の女は考えた——そうすれば今間借りをしている寺のあの西日のかつと射し込む一室から涼しいところへ脱れられる。それよりもあの下卑^{げひ}た俗悪な慾張りの口うるさい梵妻^{ぼんさい}の近くから脱れられる。そうして、静に、涼しく、二人は二人して、言いたいことだけは言い、言いたくないことはいっさい言わずに暮したい住みたい。そうすれば、風のように捕捉^{とく}しがたい海のように敏感^{びんかん}すぎるこの人の心持も気分も少しは落着くことであろう。あれほどの意気込みで田舎を懂^{あき}れてきながら、わずかなが

らもわざわざ買ってもらった自分の畑の地面をどう利用しようなどと考えているでもなく（それはもとよりそうであろうとは思ったけれども）それよりも本一行見るのではなく字一本書こうとするでもなく、何一つ手にはつかぬらしい。そうしてもしそんなことでも言い出せばきつとどなりつけるにきまっている、それでなくてさえも、もう全然だめなものと見放されている——わけて自分との早婚すぎるむりな結婚の以後は、ことにそう思われているらしい父母への心づかいもなく、ただうかうかと——ではないとあの人自身では言っても、とにかくうかうかと、その日その日の夢を見て暮しているのである。いつ、建てるものとも的^{あて}のない家の図面の、しかも実用的というような分子などは一つもないものを何枚も何十枚も、それは細かく細かく描いているかと思うと、不意に庭へ飛び出して、犬の真似をして犬と一緒にあって、燃えている草いきれの草原を這^はったり転げまわったり、そうかと思うと突然破れるような大声で笑い出したり叫び出したりするこの人は、ほんとうに何か非常に寂しいのである。何事も自分には話してくれはしないから解るはずもない。何か自分には隠しているのではなからうか……。彼の女は、五六日前に読みおわった藤村の「春」を思い出した。単純な彼の女の頭には、自分の夫の天分を疑うてみることは知らずに、自分の夫のことをそ

の小説のなかの一人が、自分の目の前へ——生活の隣りへ、その本のなかから抜け出してきたかのようにも思つてみた……。あれほど深い自信のあるらしい芸術上の仕事などは忘れて、放擲^{はなづ}して、ほんとうにこの田舎で一生を朽ちさせるつもりであらうか。この人は、まあ何という不思議な夢を見たがるのであらう……。それにしても、この人は、他人に對しては、それは親切に、優しく調子よくしながら、なぜこうまで私には氣難かしいのであるう。もしや、あの人のある女に對する前の恋がまだ褪^あせきらない間に、私はあの人の胸のなかへはいって、そのためにあの人はしばらくはあの女を忘れてはいたけれども、根強く残つていたあの恋がいつの間にか再び自分をのけものにしてまた芽を出したのではなからうか。そうして私には辛くあたる……。今のままでは、さぞかし当人も苦しいであらうが、第一そばにいるものがたまらない。返事が氣に入らないといつては転ぶほど突きとばされたり、打たれたり、何が氣に入らないのか二日も三日も一言も口をきこうとはしなかったり……。あの人はきつと自分との結婚を悔いているのだ。少くとももし自分とではなく、あの女と一緒に住んでいたらばどんなに幸福だったろうかと、時々、考えるにちがいない。考えるばかりではない、現に、自分にむかつてそう言つたことさえある——「あの時、おれがあの女、あ

の純潔な素直な娘と一緒になれさえしたならば、あの人が私をよく統一して、おれは今ごろ、いろいろな意味でもっと美しいもっと善い生活ができていただろうに」と……。實際あの女は、自分も知つてゐるけれども、自分などよりはもっと美しく、もっと優しい。私はあの人があの女をどんなに深く思つてゐるかはよく知つてゐる……いや、いや、そうではない。あの人はやっぱりあの人自身で何か別のことを考え込んでゐるのである……。そうだ、夫は、「ただ、私をそつとしておいてくれ」と言つた……。

ふと、

「俺には優しい感情がないのではない。俺はただそれを言い現わすのが恥しいのだ。俺はそういう性分に生れつたのだ」

彼の女は、昨夜、いつになく打ち解けて彼が語つた時、彼の女にむかつて言つた彼の女の夫の言葉を思い出すと、その言葉を反芻^{はんそう}しながら歩いた。そうしてまだ見たことのない家の間どりなどを考えた。たとい新婚の夢からはとつくに覺めたころであつても、こんな暑さの下でも、ただ単に転居するというだけの動機で心持がふだんよりもずっと活き活きとしてきて、こんなことを考へて悲しんだり、喜んだり、慰んだりすることのできるのは、まだ世の中を少しも知らない幼妻^{おんなうま}の特權であつた

からだ。そうしてそれがまた、あの案内の女が、しゃべりつづけにしゃべっているその家の由来について、何の興味も持たぬらしく、ただ無愛想に空返事を与えているにすぎなかったゆえんである。——この案内の女は、その長い暑苦しい道の始終を、ながながとしゃべりつけて休まなかった。この女は自分の興味をもっているほどのことなら、他の何人にとつても、非常に面白いのが当然だと信じている単純な人々の一人であつたから。

こんな道を、彼らは一里近くも歩いた。

そうしてその家は、もう、彼ら一同の目の前にきていた。

家の前には、はたして渠が流れていた。一つの小さな土橋が、茂るがままの雑草のなかに一筋細く人の歩んだあとを残して、その上を歩く人々に、あの幅一間あまりの渠を越させて、人々をその家の入口へ導く。

人口の左手には大きな柿の樹があつた。そうして奥の方にもあつた。それらの樹の自由自在にうねり曲つた太い枝は、見上げた者の目に、「私は永い間ここに立っている。もう実を結ぶことも少くなつた」とその身の上を告げているのであつた。その老いた幹には、大きな枝の脇の下に寄生木が生えていた。その樹に対して右手には、その屋敷とそれの地つづきである桐畑とをくぎって細い溝があつた。何の水であろう。水が涸れて細く——

その細い溝の一部分をなお細く流れて男帯よりもっと細く、水はちよろちよろ喘ぎ喘ぎ通うていた。じめじめとした場所を、一面に空色の花の月草が生え茂つていた。また子供たちが「こんべとう」と呼んでいるその菓子の形をした灰赤く白い小さな花や、また「赤まんま」と子供たちに呼ばれている野花なども、その月草に雜つて一带にはびこつていた。それはなつかしい幼な心をよびさます叢であつた。屋間は螢の宿であろう小草のなかから、葉には白い豎の縞が鮮に染め出された蘆が、すらりと、十五六本もひとところに集つて、爽やかな長いそのうえ幅広な葉を風にそよがせて、ざわざわと音をたてているのであつた。屋敷の奥の方から流れ出てきた水は、それらの小草の茎をくぐつて、それらの蘆の短い節々を洗いきよめながら、うねりうねつて、解きほぐした絹糸の束のようにつやつやしく、なよやかに揺れながら流れた。そうして、か細く長々しい或る草の葉を、生えたままで流し倒して、その草のために一時流動することをさえぎられたそれらのささやかな水は、その草の葉を伝うて、より大きな道ばたの渠のなかへ、水時計の水のようにぼたりぼたりと落ちそいでいた。彼にはこの家の屋後に、湧き立つ小さな清新な泉がありそうにも感ぜられた——そういう地勢でもあつたから。

家の背後は山つづきで竹藪になつていた。竹のなかに

はすばらしく大きな丈の高い椿が、この清楚な竹藪のなかの異端者のように、重苦しく立っていた。屋敷の庭は丈の高い——人間の背丈よりも高くなった榊の生垣で取り囲まれてあった。家全体は、指顧の遠さで見た時にそうであったごとく、目の前に置かれてみても、茂るにまかせた樹々の枝のなかに埋められて、茂るにまかせた草の上に置かれてあった。

犬は一足ずつ土橋の側から下りていって、灌水の水を交々に味うた。

彼はその土橋を渡ろうともせず、「三徑就荒」と口吟みたいこの家を、思いやり深そうにしばらく眺めた。

「ねえ、いいじゃないか、入口の氣持が」

彼はこの家の周囲から閑居とか隠棲とかいう心持に相応した或る情趣を、幾つか拾い出してから、妻にむかつてこう言った。

「そうね。でもずいぶん荒れていること。家のなかへはいってみなければ……」

彼の妻は少々不安そうに、またさかしげに、氣まぐれな夫をたしなめる時にすべての妻がする口調をもつてそう答えた。しかし、すぐ思いかえして、

「でも、今のお寺にいることを思えば、どこだっていいわ」

今飲んだ水から急に元氣をえた二疋の犬は、主人達よ

りも一足さきに庭のなかへ跳り込んだ。松の樹の根元の濃い樹かげを掘んだ二疋の犬どもは、わがもの顔に土の上へ長々と身を横えた。彼らは顔を突き出して、下顎から喉首のところを地面にべったりと押しつけ、両方から同じ形に顔を並べ合った。そうして全く同じような様子に体を曲げて、後脚を投げ出した様子は、まことに愛らしいシンメトリイであった。赤い舌を垂れて、苦しげな息を吐き出しながら、庭にはいつてきた彼らの主人達の顔を無邪気な上眼で眺めて、静かに楽しそうに尾を動かしてみせた。いかにも落着いたらしいその姿は、ここがもう自分たちの家だということを、彼らの主人たちよりさきに十分に予覚しているらしいようにも、彼には見られるのであった。もしこの時、妻が彼のそばにいたならば彼は妻にこう言つたらう——

「ね、フラテもレオ（二つとも犬の名）も賛成しているよ」

けれども彼の妻は、案内の女と一緒にその縁側の永い間閉されていた戸を開けようとして、鍵で鍵穴をがたがたいわせている。

樹という樹は茂りに茂って、緑は幾重にも積み重なった。錯雑した枝と枝とは網の目になり壁になり軒になつて、庭はほとんど日かげもさし込まなかった。土の匂は黒い地面から、冷々と湧いてきた。彼は足もとから立ち

のぼるその土の匂を、香を匂う人のように官能を尖らせてしみじみと味うてみた——じゃらじゃらと涼しく音を立てていた鍵束の音がやまって、縁側の戸が開けられるまで。

* * *

「やっと、家らしくなった」

昨日、門前で洗い淨めた障子を、彼の妻は不慣れな手つきで張ったのである。最後の一枚を張りおわった時、それを茶の間と中の間のあいだの敷居へ納めようとして立っている夫の後姿を見やりながら、妻は満足に輝いてそう言った。

「やっと家らしくなった」彼の女は同じことを重ねて言った。「畳はすぐかえに来るといいうし……。でも、私はほんとうに厭だったわ、おとつい初めてこの家を見た時にはねえ。こんな家に人間が住めるかと思って」

「でも、まさか狐狸の住家ではあるまい」

「でもまるで浅茅が宿よ。でなきや、こおろぎの家よ。あの時、畳の上一面にびよんびよん逃げまわったこおろぎはまあどうでしょう。恐しいほどでしたわ」

「浅茅が宿か、浅茅が宿はよかったね。……おい、以後この家を雨月草舎と呼ぼうじゃないか」

（彼ら二人は——妻は夫の感化を受けて、上田秋成を讀

美していた）

夫の愉快げな笑い顔を、久しぶりに見た妻はうれしかった。

「そこで、今度は井戸換えですよ、これが大変ね。一年もまるで汲まないというのですもの、水だったいがい腐りますわねえ」

「腐るとも、毎日汲み上げていなければ、俺の頭のように腐る」

この言葉に、「またか」と思った妻は、今までのはいやいだ調子を忘れておずおずと夫の顔を見上げた。しかし夫の今日の言葉はただ口のさきだけであつたとみえて、その骨ばった顔にはもとのままの笑があつた。それほど彼は機嫌がよかつたのである。それを見て安心した妻は甘えるように言いたした。

「それに、庭を何とかしてくださるなきやあ。こんな陰気なのはいや！」

疲れて壁にもたれかかった妻の膝には、彼と彼の女との愛猫が、しなやかにしのび寄つてのっそりと上つていくところであつた。

「青（猫の名）や。お前は暑苦しいねえ」

と言いながらも、妻はその猫を抱き上げているのである。彼の家庭には大がいる。猫がいる。いったん愛するとなると、程度を忘れて溺愛せずにはいられない彼の性